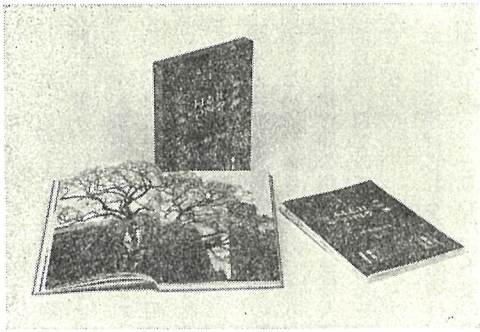
キャンパス風景を写真に

——その目的と四季表現——

山田興司



写真集〔同志社の四季〕

中学生と共に理科の勉強をしてきて、理科教材についてのいろいろな悩みが出てきた。その一つに天体の授業の中で、如何にしてこれらの動き、諸現象を教室の中に持ち込むかということであった。地道な観察と時間の要するこれらについて、興味を示す一部の生徒を除いては、あまり反応を示さない。理科の教科書は、現在第一分野（物理・化学）と第二分野（生物・地学）に分れていて、天体に関しては第二分野で扱かっている。本校においては、二年生時にこれらのことを集中的に学習するシステムをとっている。

これらの授業の進行にあたって、最初に試みた方法は、「天球儀」を生徒二人に一個の割合で使用できるように理科室に備えることであった。数年の購入計画の後に、現在ではこれを実現した。これらの天球儀の操作により、授業時間外の天体の諸現象を理解させるとともに、画一的になりがちな授業を補なってきた。このような一例を基に中学生に天体に関する興味をもたせながら、それなりの学習効果も上がってきた。

「天体の動き」に関する基礎的な学習の後にとり組まねばならない、つぎの問題は「観察」であった。教科書の指示の一つに、「星の動きをスケッチまたは写真に撮る」、ことによってこれらの動きをさらに理解するという項目があった。これを満すために、本校教科では夏休みにこれを課題として、二年生全員に課してきた。しかし二学期の授業が始まってみてもこの課題を仕上げてこない生徒が約三割程いた。これらの生徒にその訳を聞いてみると、なんと「街の中では星が見えない」という答えが返ってきた。一部の地域にはそのような事は、予想されるが、これには驚いた。そこでこれらの生徒に全てがそうではないことを納得させるために、身近かな教材として、本校のキャンパス内で見られる星の動

きを、実例として示さなければならないと思い、写真1のような教材を作ってみた。

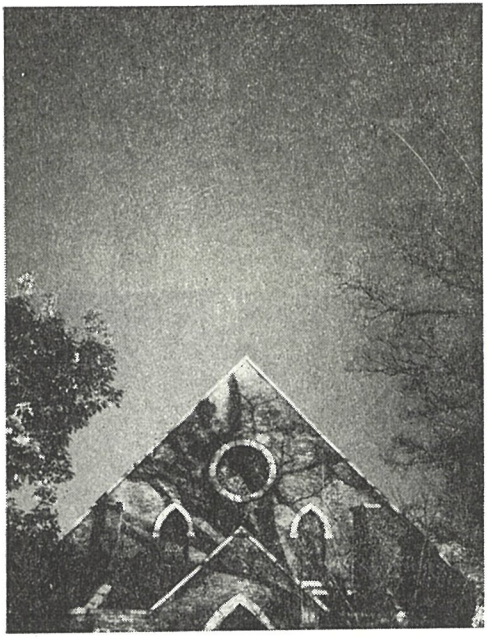
これはチャペルの屋根の先端に北極星が位置し、ほぼこれを中心として、北の空の星が「日周運動」をしている様子を示したものである。チャペルの玄関前より三歩大通りに出た所より、うしろをふり返って見ると、チャペルの屋根の先端には、いつもこの北極星が位置し、北の空の星が地球の自転にともなって、ほぼこれを中心にして、時計の針の逆方向の動きで「見かけの運動」をしていることを理解させたものである。

このような身近かな教材を示すことによって生徒の学習意欲を高め、さらに発展させてゆくことを意図して撮り始めた教材写真が集まってきた。

「クラーク記念館上に昇る満月」、「チャペル東側に動くオリオン座」、「彰栄館時計台横に沈む太陽と三日月」、「昭和五十七年十二月三十日の皆既月食」、「明徳館後方に昇る下弦の月」、「東山に昇る太陽」、といったキャンパス内で見られる天体の動きの数々、これらは先に示した（写真1）より出発して得られた教材写真である。

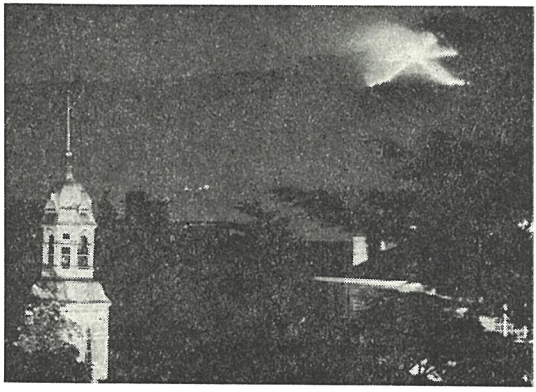
夜のキャンパス内で撮影していて、いろいろ面倒なことがあった。その一つはキャンパス内を行きかう自動車やバイクのライトであった。先に述べたそれぞれの写真（題目）は、一枚を撮り終えるのに少なくとも二時間以上の露光が必要であった。あと数分ほどで撮影完了という時に、これらのライトがレンズに飛び込むのは厳禁であったし避けねばならない。このようなことから撮影は大学二部の講義が終了し、学生諸君のバイクが走り去った後に行うのが常であった。

しかし深夜まで研究実験の続く人達のバイクや自動車が思わぬ所から飛び出し冷汗をかいたことも何度かあった。又、目的の天体物を追い続ける時に、必ずしもこれが深夜に目的の場所に出るとは限らず、例えば満月の出は夕方の六時過ぎより東山に見られ、その十数分後にキャンパスの建物上にその姿を現わすといったこともあり、このような時には特に気を使わねばならなかった。目的の天体物（星・月）がいつごろ、キャンパスのどの辺りに出没するかということは、天球儀や星座早見盤等を駆使することによって予知することができるが、その数日前より予備観察が必要であったことはいうまでもない。撮影目的日が日曜、



チャペル上の北極星と日周運動（写真1）

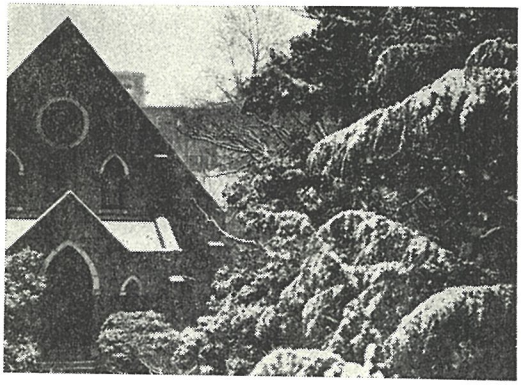
祝日に当るときには前述のような心配も少ないのだが、そういったことは稀れであった。キャンパス内で天体を撮影するときに、樹木の葉が時として撮影視野を狭めることがあった。どうしてもこの位置から撮りたいと思ったときには、前方の樹木の葉の落ちる晩秋以後の撮影となり、撮影時期を大幅に限定されることになった。又、その時期に決めた撮影日が晴天で、木々の枝のゆれが少くないといった日和に恵まれることは、そんなに多くはなかった。一旦撮影に入ったならば失敗は許されるものではない。なぜなら、つぎの撮影チャンスが明日保証されているわけでない。例えば、昭和五十七年十二月三十日に見られた皆既月食といったものは、又すぐに観察できるといったものではない。このような撮影の時には、必ず複数のカメラを用意し、同じ撮影条件で、数枚の撮影を試み、現像の段階で、一枚目のフィルムを正規の条件で現像をし、その結果をみて、残りのフィルムの現像を指示した。



燃える大の字（写真２）

キャンパス内で天体と夜景を撮る上でもう一つの大きな問題点があった。それはキャンパス内のあちこちに存在する外灯と、建物の中からもたらされる燈火であった。星の動きの軌跡を追うときには、この燈火が撮影効果に少なからず影響を与えた。こういった意味でキャンパス内の建物の灯が消えるのをまってという場合も幾度もあった。しかし外灯は消えることはないので、その処置にはいろいろ悩まされた。しかしこれらのキャンパス内の外灯が、周囲の建物、樹木をフィルム上に浮び上がらせてくれるすばらしい光源でもあった（写真2）。このような意味からも、これらの外灯を如何に応用するかといったことが撮影上非常に大切なことでもあり且つ、悩みに連らなっていた。夜の風景写真で、「何故樹木や建物がこんなにはっきりと写し出されるのか」と、よく聞かれたが、実はこの外灯をうまく利用していたのである。

何度かの試写により、その位置での撮影データーを積み重ね、キャンパス内に繰り広げ



降　雪　中（写真３）

られる天体の動きをなんとか撮ることができるようになった。

寒々とした人気のないキャンパスでただ一人カメラのレリーズをにぎり、刻々と移り行く天体の動きを追跡するこの作業は単純そのもので、根気と粘りそのものであった。でき上ったフィルムをみて、予想通りの結果を得ることもあれば、その逆のこともあった。寒さのため、長時間露光したレンズに露がつき、現像の上がったフィルムには何を写し撮ったのかわからないといったことも幾度かあった。細かいことを話せば切りがない。何はともあれ、このような撮影に情熱を傾むけられたのは、幼さない頃からの自然美に対するあくなき興味と、同志社に学び、このキャンパスに繰り広げられる数々の天体美を少しでも多くの生徒達に分け与えようとする心からであろうかと、ふと思うことがある。

以上のような観点で、キャンパス内の写真を撮り終えてみて、つぎのような事が頭の中に浮んできた。それはこれまでの作品にあと昼間のキャンパス風景をとり入れてみることにより、今出川キャンパス内に繰り広げられる「四季」の展開がくみ立てられるのではないかということであった。

私は昭和四十二年四月に現在の職場を与えられ、その年の秋に、チャペルのステンドグラスの投影がチャペル内の白壁に写し出される様をみて、その美しさに、感激したことがある。つぎの撮影はここから始まった。入社当時、この光景はカメラに撮らなければと思いつつそれは果せなかった。その当時私は運動部（野球部）の指導に熱中していて、このことにじっくりと打ち込める時間と心のゆとりはなかった。

最初に少し触れたように、中学生と共に理科を学んできて、先ず感じたことは、自然界の諸現象を身近かな実例を示すことによって、生徒達に納得させることがいかに大切なことであるかということを学んだ。授業を通して、「大陽の動き」が自然界の諸現象、すなわち自然美を決めると言い続けてきた証しとして、このチャペルのステンドグラスの投影の様は、格好の教材でもあった。キャンパスの木々や建物の間を通りぬけてきた陽光がステンドグラスに届き、その投影が、先ず白壁に写し出され、つぎに座席の背もたれに、そしてフロアーへと刻々と移り行く様は、太陽の動きそのものであった。このような美しさがこのチャペル内で繰り返されていることを多くの生徒達に知ってもらう願いでカメラを向け続けてきた。このような光景は、太陽が最も南に片寄る冬至の頃が美しい。

私の意図する「四季」の骨格は、これで大部分固まってきた。あとはその季節を特徴づける「花」「樹木の芽吹き」・「空の色」・「雲の形」・「葉の色」・「落葉」そして「雪」等を写し撮ることであった。これらを対象にした撮影で一番大切なことは、その季節を特徴ずけるシャッターチャンスを絶対に逃がしてはならないことであった。例えば、イチョウ、エノキの芽吹きの様は、ごく数日と限られているし、花の場合も同様である。もう一つ記しておきたいことがある。それは冬の降雪風景のことで、降雪中の雪（写真3）を如何にしてキャッチするかということである。私は撮影に際し、質感表現にすぐれた、大型フィルム（カメラ）を用いて撮影を試みたが、このようなフィルムはその感度が非常に低く、実効感度はさらに低くなる。そのため速いシャッターが切れないために、実際の撮影では予めフィルム現像を二絞りの増感を予定して

実際の露光より二段階速いシャッター速度で撮影した。このような方法で何んとか、降雪風景を写し撮り、それを表現できたのではないかと思っている。

教材写真から始まり、これをベースにして同志社今出川キャンパスに繰り広げられる四季折々の変化を、写真展と写真集にまとめてみた。何気なく毎日みているキャンパス風景も、季節と時間帯を選んでみると意外な顔を見ることができた。

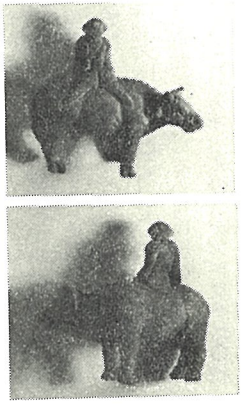
同志社時報編集委員会より、撮影のエピソードを記せということであったが、それに値するものがあったかどうかよくわからない。ただ、根気よく地道にキャンパス風景の移り変わりを追い続けてきたことに尽きると思う。

（中学校教諭）

同志社校地出土の埋蔵文化財（7）

鈴木　重治

童子騎牛像（ドウジキギュウノゾウ）



（大学図書館地点で、一九七二年九月二八日、第二トレンチ第二層より出土）
像高・八、三㎝、安土・桃山時代

今出川校地の南西部にあった、啓真館と聚芳館の木造建築が撤去された機会に、埋蔵文化財の発掘調査がおこなわれた。一九七二年の秋のことであり、大学図書館の建築に先立つ学術調査であって、同志社大学校地学術調査委員会による第一回目の発掘調査でもあった。

この調査中、南に寄った第二トレンチ（発掘坑）の第二層から、中国産の輸入陶磁器や、京都産の土師皿などに混じって出土したのが、ここに示す童子騎牛像である。

灰黒色を呈している瓦質の胎土は、よく精選されたきめ細い良質の素地であって、室町時代から安土・桃山時代の瓦の胎土に極似している。鬼瓦などの造形にかかわった瓦師の作品と考えられることと、牛の背に横座りする童子の形態から、近世に入ってから全国の土人形に影響を与えたという伏見人形に関係する資料とみられる。型作りの伏見人形に先行する古式のタイプに属していて、瓦質土偶の変遷史上、注目される作品である。

おおらかな表情の童子と、肉付きの良い牛とのバランスもよく、目、鼻、耳、爪、尾などの細部についても刺突孔や、ヘラオサエに心にくいばかりの配慮がうかがえる。

年代については、同時に出土した遺物のほとんどが、室町時代から江戸時代にかけてのものであり、下層で確認された三枚の焼土層中の遺物も含めて、考古学的な方法での層位の確認によって、一六世紀後半と考えられている。しかし、暦年代などの絶対年代については、類例の確認をまって決定すべき資料である。

この作者は、相国寺に伝わる重要文化財の周文筆「十牛図」をみているのかもしれない。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）